

てことと也。その有所は不知候へども、今の立別れし方をしるべに、尋ぬべしとて尋ければ果してめぐり逢、同道して来る。水野殿其方が頼もしき心底を感ず。客人分にて我家にあれば有ければ、忝存候。いかやうにも可任仰と云。さあらば永く子々孫々迄、物頭を可申付とて被召出、今に至るまで如約束、其子孫物頭となる也。今年の冬出羽守殿、於東都卒去に付、右和田が子孫、在所信州松本より罷越候由物語を承候也。實に享保三年戊戌閏十月也。

一、太田道灌の花月百首

太田道灌は武道に名ある人也。そのいとまなみ和歌の浦、みぬいにしへになみ越給ふなど、今めかしく取りくゝに申侍る事ありしに、ある御方よりそれらの人の百のことの葉集めて、一冊となせるありとて恩借ありし。濱千鳥のあとをしたはましけれども、此ほどは殊にいとまなき心地して、はやく返し送りてき。よつて百の詠草といへども、題號と奥書と二首の歌を左に記して、其人の心をほのうかどふものなりけんよし。

本から紙古く、外題うらつけき、表紙もなし。
太田道灌花月百首

全 花の中一首不足

太田持資號蓮乘院道灌 飛鳥井權大納言雅親點
花月百首

春きても見ゆるめなきさの櫻花霞吹とけしがの浦かぜ
尤風情似に流
芳野山花につゞきてさく花やうつろふ雲の匂ひ成らん
つゞきてとは在座時節に流
山どりの尾上の櫻ながき日もあそぶほどなき山櫻かな
珍重に候
花もまたあはれとみずや石上ふりはつるまで惜む心を
尾上には雪かとみえてちる花やさど浪よするしがのうら風
感ありありある事か
ちりまがふ花の盛はわれならぬ人も心や空に成らん
たづねみん世を宇治山の櫻花みやこのたつみ匂ふ春風
見ればまづあはれぞ添ふる四十餘り半ばふけゆく秋の夜月
夕暮のあはれはものゝ數ならず鳴たつ澤の有明の月
秋の夜は唐までもおもひやる月に心のあかぬあまりに
おもふことなき古への秋の夜も月には袖のしほれし物を
里はあれ野となるつゆの深草やうづらが闇をてらす月影
尤座に聞え候。そのうへへ本歌のとりより長におもふたまつられとや。
あらざらん後のやみぢもてらさなんなれし都の秋の夜の月
こなたにかよふ心づかひにやあはれに候。殊更此たびの行軍は、
大切にや候はんと、おもひよられたる趣、尤感あまじく聞え候。
もろとも月に月もうきねやしのぶ覽物思ふ袖に影もはなれず
尤座心

草枕かはるならひのこととはに出しまゝなる秋の夜の月あはれてふいとせなれぬ秋の夜の月は昔の面かはりけん
こゝにも同じ心のおもむき、咫尺千里の月に、猶疑見古人一かと吟じ侍らんや。

僻墨四十五點

右百首。自相州鎌倉比企谷泰雲寺傳寫之。獻藤左府二條殿者也。

天正十二年十一月下旬七日 藤 雅春

元祿元年二月上旬寫之畢 羽田 觀義軒筆

愚曰。飛鳥井卿批点の内、長におもふたまつられとやと云。傳寫の誤にや。何とも語意聞えがたし。且又猶疑見古人かとの句は杜詩に有之。落月滿屋梁。猶疑照顔色。と申す下句なるべし。

一、佐野宗綱平語を聴て泣く

佐野修理大夫宗綱上野佐野十萬石領す。といひしは、後は京師に行て天徳寺といふ。此人いまだ佐野におはしける時、越後國主の國へ都より、平家を能かたる檢校下りしと宗綱聞て、其國主へ申遣しけるは、我等平家を聞申事大望に候へ共、普廣院殿御前にて承候以後は不承候。此度其元へ上手の檢校下り

候由。それより歸りに此方へ參候様に頼入候。京へかへり申事は、是より人を添遣べしと被申越候。檢校佐野に到りぬ。家中のものは平家承る事もなき事なれば、いづれも罷出承候様にとの事にて、其期に至り家中不殘罷出、段々に祇候す。扱いづれの平家にても、哀なる句を語り候へとあり。檢校は迎の事に御好みあれと申候へば、只何にてもあはれなるを聞申度との事也。そこにて語出せるを聽けば宇治川也。各しづまりかへつて閑居たり。修理殿殊の外感じ、扱々哀なる事也、扱もくゝとて、後には怪しきばかり落涙也。家中の者どもはさのみ哀にも思はず。何故かやうに落涙はいたされ候やと存する躰にて、各面を見合せ、若は氣色ばし御滞りなど、私語く族もあり。其句終れば今一句聞べしとあり。又御好をと檢校申候へば、とかく哀なる句よろしく候間、何にてもとの事也。此たびは那須の與市ぞ語出せる。然に又修理殿感涙をとどめ兼、後は彌無限落涙なり。家中の者共是はなにたる事ぞや。六代きられ、小原御幸などの様なる句ならば哀をも可催を、何とてかやうに落涙はある。御氣色などつかへ給ふかと、平家を開心地も無く、此事を笑